

「見えない経験、組織されない身体」

山岡さ希子パフォーマンス 2020/10/25 『Body Trouble/Maintenance』

参考 note 「生成する時間」

「私は自分が絶えず連続的に流れていくのを見る。自分がいまにものみこまれようとするのを見ないような瞬間がすぎていくことは一刻もない。しかし神はその選ばれた人たちを、彼らが決して水に沈まないようにささえているのだから、わたしは強く信じる、数かぎりなくやってくる嵐にもかかわらず私がいぜんとして残るであろうことを。」 ジョルジュ・ブーレ『人間的時間の研究』

「瞬間ごとにわたしは自分から抜け出して行くような気がする……」 モンテーニュ『エッセー』

「魂は……各瞬間がおのれの幸福の享受を奪い去ること、おのれにとってもっとも親愛なものが間断なく流れ去ることを見て、愕然とする」 パスカル『パンセ』

「もし、いわば私が、各瞬間、なんらかの原因によって新たに創造されないとしたら、そのあともなお存在するはずだという結果は生じない」 デカルト

「人間は、自分を見棄ててゆくこと、自分の前に閉ざされた未来とのあいだで、思い出もなく、希望もなく、いったい何をしようというのか？」 コンスタン『宗教について』

「死への抵抗、長い、毎日の、必死の抵抗……しかもその死は、断片的、継起的な死であって、われわれ一生の全持続に割り込む」 プルースト『花咲く乙女たちの影に』

「時間の流れもひどくおかしい。時間がばらばらになってしまっていて、ちっとも先に進んで行かない。てんでばらばらで繋がりのない無数の今が、今、今、今、今、と無茶苦茶に出てくるだけで、なんの規則もまとまりもない。私の自分というものも時間といっしょで、瞬間ごとに違った自分が、何の規則もなくてんでばらばらに出ては消えてしまうだけで、今の自分と前の自分との間に何のつながりもない。……ずっと以前にあった本当の自分がだんだん遠くなり、見えなくなってしまう。」

木村敏『自覚の整理病理』「離人症のあらゆる特徴を完備した典型例」

「ホピ族にとって時間は……消費されるのではなく、蓄積されるのである。それはいわば日の繰り返しが同一人物の再訪と感じられているようなものである。」 ベンジャミン・ウォーフ『言語、思考、現実』

「いくつかの未開社会では、時間は、持続しない何か、くりかえす逆転の反復、対極間の振動することの連続……すなわち、夜と昼、冬と夏、乾燥と洪水、老齢と若さ、生と死という具合である。このような図式にあっては、過去は何ら「深さ」をもつものではない。すべての過去は等しく過去である」 エドムント・リーチ『人類学再考』

もしかりに消滅が時間の働きであるという論理をとるならば、少なくとも生成は同じ資格で時間のはたらきであるはずである。

以上、『時間の比較社会学』真木悠介（岩波書店）より